

<p>上演 1</p> <p>2022年7月31日(土) 1校目</p> <p>関東 ブロック (東京都)</p> <p>東京都立千早高等学校</p> <p>『7月 29 日午前9時集合』</p>	<p>第46回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第68回全国高等学校演劇大会</p> <p>講評文</p> <p>生徒講評委員会 担当委員</p> <p>(埼玉県) 埼玉県立鳩山高等学校</p> <p>西岡 亜花莉</p>
--	--

『7月 29 日午前9時集合』——このタイトルを見た時、何が始まるのだろうか？とワクワクした。しかし、そこに描かれていたのは幼い兄弟姉妹と悩みを抱えた高校生たち。そして他者に興味を示さず、様々な物事にあまり関心を持っていない、私達の人間関係だった。

文化祭の出し物を決めるために集まった3人。女子生徒達がだるそうに、そして当たり前のように口にする。熱を出した妹の面倒を見なければいけないこと、母親の出産に際して赤ちゃんの世話をするのは自分であること…。何も知らない私達観客は、なぜ彼女達がこんな話をしなくてははいけないのだろうか？と胸をザワつかせるが、それでも淡々と会話が続く。途中、男子生徒が「アレルギー持ちで、入院しなければならない」とこぼしても興味が無さそう。次第に彼女達の会話は不登校ぎみのクラスメイト「サガ」が学校を辞めるかもしれない、という話題へと傾いていく。

まず、演出等の面では SE が非常に効果的で、ずっと蝉が鳴いているように聞こえ、舞台上にいっそう蒸し暑さを漂わせていた。また、独特な机や椅子の置き方から「夏休みの空き教室にいるのだ」と錯覚させられた。そして何よりも、自然なセリフ回しに驚いた。恋バナや先生の悪口、ギャグ、肩身の狭い男子生徒をよそに交わされる女子の下ネタ、スマホ越しの会話…。どこにでもいる高校生3人の他愛もないおしゃべりと思春期のリアルな姿に、ほとんどの講評委員が共感を抱いた。だからこそ、“ヤングケアラー” や “退学” という題材が重くのしかかる。注目すべきはラストシーンだ。舞台上にこれまでほとんど姿を現わさなかった不登校の生徒「サガ」と思われる少女が登場し、机に突っ伏す。そんな少女の孤独を強調するかのように暗闇にサスが差し込む。「あなただけが頼りなのよ」と彼女を責める声が鳴り響く——。少女は「サガ」なのか、抽象化された人々なのか。目に見えない大勢の人に少女の声がかき消されていくのが見ている側としてはとても辛く、無力感でいっぱいになる。感動よりも怖さを感じるラストだった。

講評委員会では「サガ」が学校を辞めるということにどこか一步引いている冷たい登場人物達、そして「サガ」が相談すら出来なかったことを指摘する意見が多く挙がった。一方で「自分たち高校生は全然自由ではない。」という声が挙がったことも印象的だった。教室では本音は言えない。「サガ」のように髪を染めずとも、本心を隠して、教室では明るくしないと自分を保てない。それは私達も同じだ。

モノローグの中で「この日付に意味はありません」というセリフがある。彼らにとってこの日付は意味が無いのかもしれないが、別の誰かにとってはそれが重要な日になるかもしれない。他人と向き合ったり、自分をさらけ出すことはとても怖いことだ。他人に触れないことが優しさではないか、と思う自分もいる。しかし、相手を理解しようとする、その上でどのように相手と関わっていくかを考えていくことが大切なのではないか。そのようなことを私達高校生に深く考えさせてくれる作品だった。